

れきし 散歩

亀博自由研究のひろば 「昔の人が経験した災害」

はじめに

歴史博物館では、7月4日(土)から8月31日(月)まで、毎年大人気の「亀博自由研究のひろば」を開催します。今年のテーマは「災害」。市域で過去に起こった災害の歴史を学べます。そこで今回は、展示内容の一つである「雨乞い」についてご紹介します。

加太の雨乞いと太鼓踊り

市内の各地で行事の一つとして行われてきたかんこ(鞆鼓)踊りや太鼓踊りは、江戸時代に日照りが続いた時に、雨乞いを祈願して踊ったことに始まったといわれています。

現在見つかっている記録の中で、雨乞いでかんこ(鞆鼓・太鼓)踊りが踊られたことをはっきりと示す最も古いものは、加太地域の太鼓踊りです。

加太地域での雨乞いの記録の初出は、貞享4(1687)年で、7月18日に雨乞いが成就した神様へのお礼に、加太8ヶ村により踊ったとあります。この時は踊りの方法は記されていませんが、後の記録では、太鼓踊りが行われたことが記されています。

その内容は次の通りです。元禄3(1690)年の夏は大変な大日照りだったため、6月5日に雨乞いをしたところ、雨が降りました。そこで、神様へのお礼の方法を鬮で占ったところ、「籠もり」とお告げがあったので、6月14日に加太8ヶ村より「切子」をそれぞれ2つ3つほど用意し、踊場に籠もって踊りました。ここで記されている「切子」は、市内のほかの地域のかんこ(鞆鼓)踊りには見られない、加太地域独特の切子灯籠をのせた笠のことです。

また、同じ年の別の日にも再び雨乞いをした結果、十分に雨が降ったので、7月1日に今度は、花笠をつけて踊っています。これらの記録から、加太地域では、雨乞いが成就した神様へのお礼として、太鼓踊りを踊っていたことが分かります。



加太向井の笠

白木の雨乞いとかんこ(鞆鼓)踊り

現在は途絶えてしまいましたが、白木地域でも嘉永5(1852)年7月1日～2日と嘉永6(1853)年6月10日～15日に、雨乞いのためのかんこ(鞆鼓)踊りを踊ったとの記録が残っています。



白木村の雨乞いの記録(館蔵)

この当時の白木地域の雨乞いの方法は、最初に氏神の前で踊り、次に国分寺へ行って雨乞いをするのがしきたりとなっていました。踊りには、額太鼓、鞆鼓、法螺貝を用いました。現在の市内でのかんこ(鞆鼓)踊り・太鼓踊りと同じスタイルです。

当時の白木村では、額太鼓を所有していたのは、一色組北出、中里・岡、上白木で、村全体で3つ所有していました。それぞれが額太鼓を据える場所は、北出が中央、上白木が左座、中里が右座というのが先例となっていました。この据え場所については、嘉永4(1851)年より村内でもめ事になっており、嘉永6(1853)年の雨乞いでは、この額太鼓の置き場所を巡って乱闘騒ぎとなり、けが人が出てしまいました。

さいごに～歴史博物館からのお知らせ～

「亀博自由研究のひろば」では、展示室に机とイスを用意しています。そこに設置してあるノートに内容を記入していけば、自由研究の宿題として学校に提出することもできます。さらに、特典として、自由研究をした人には、展示内容にちなんだオリジナルボールペンをプレゼント。

大人も関心を持っていただける内容となっていますので、ぜひ、歴史博物館へ遊びに来てください。



オリジナルボールペン
(イメージ)